入寺疏の序を読んで

山口隼正

Reading the Preface of the Nyūjisho (Accounts of the Chief Priests' Appointments to Zen Temples)

Takamasa YAMAGUCHI

最近、禅文化研究所（花園大学）からのお誘いにより拙稿「入寺疏の序について」を成し、入寺疏各種の基本形について考察（字句の特徴などを通じて）したが（加藤正俊先生喜寿記念論集『禅文化研究所紀要』二八号、二〇〇六年二月）、その稿の末尾に「入寺疏年表」を既に作成していることを付言した。その拙稿では、紙数の関係で「年表」を提示できなかったので、ここにあらためて「入寺疏年表」を提示、これに基づいて若干の考察を行いたい。もちろん、上記拙稿でふれ得なかった点についての考察である。

このところ、全国の禅宗寺院の史料、特に入寺関係史料（入寺語録、入寺疏など。入寺とは、新住持として任命された現地の寺院に着任すること）の文体や構造に関心をいだいており、若干公表してきたが、本稿もその一環である。

[入寺疏年表の作成]

日本中世（鎌倉～戦国初）の入寺疏について、実例をかなり蒐集～通覧し、追い追い年表を作成して来たが、本稿では、このうち序（叙）すなわち序文があり（〃有序〃）、年次の判明する分について抜粋し、「入寺疏年表」として編成、提示しよう。このように序＝序文があり年次の判明する入寺疏の場合は、念のため、同時点の他の入寺疏（全て、即ち序のない分も）と、対応する入寺語録や公帖についても併せて表示した（セットとして）。一方、序のない入寺疏しか残らない場合は、たとえ年次が判明しても、また対応する入寺語録などが残っていても、全く表示しなかった（注1）。

本表は、本稿の末尾に「入寺疏年表」として提示する。

さて広く実例に接するに入寺疏は、（A）もともと原物（原本）では序（叙）、疏（本体、駢儷文）、年月日、連署部分が備わっていたが、書写・伝来する過程で、（B）先ず連署部分が削除され、（C）

つぎに年月日部分（〃年月日疏〃）が削除され、（D）ついで序の全部が削除され、最後に疏（本体）のみ残され、その間、疏（本体）の八字称の部分も簡略化し（発句「共惟」～具体的僧名の消滅、代わって「某～」なる表記の出現）、次第に変容していったと推察できる。以上の点、先稿「入寺疏の序について」で指摘したが、先稿で、考察のため実例として挙げた入寺疏は、このうち基本形－原形に近い、概ね（A）（B）段階のものだった。ところが現在、集に収録されている入寺疏は、実は（C）（D）段階のものが多い。特に注目すべきは（C）段階のもので、これは、連署部分や年月日部分（〃年月日疏〃）はないが、却って序の部分が編集され詳細になって行く傾向にあり（序文の肥大化）、総体的に原形は損なわれているが、当時の政治社会状況などを知る上に好史料となる。

以上の点を土台にして、試案だが次のように入寺疏の型を分類し、「入寺疏年表」末尾の「備考」欄に符号（ABC～）で記入してみた。

A　原本。この実例は、主に玉村竹二「応仁以前の五山入寺疏の伝存一瞥」（『日本歴史』三八九号、一九八〇年）に紹介・提示されている（注2）。

（A）原本写。実例は、特に国立国会図書館所蔵『疏藁』四に所収される（注3）。

B　最後の連署部分は削除されているが、年月日部分（〃年月日疏〃）はある。序＝序文は原形を遺し、割と短文。

（B）序あり、表題の下に年次が記されたもの。

C　つぎに年月日部分（〃年月日疏〃）も削除されているが、序はしだいに長文化し、その文中（記事）に概ね住持任命～入寺の時期などを記してあるもの。この実例は、非常に多い（注4）。

D　ついで序の全部が削除され、最後に疏（本体、駢儷文）のみ残されているもの。

（D）序はないが、表題の下に年月を記したもの。特に『瑞渓疏』（玉村竹二『五山文学新集』五所収。以下、「五山新五」などと略す）に、この型の例が多い。

E　序はないが、疏（本体、駢儷文）の末尾に年月日部分（〃年月日疏〃）が見えるもの。この例は僅かだが、注目できる。編集（〃集〃作成）の過程で、序を削除し、却って年月日部分（〃年月日疏〃）を残したのであろう。

あらためていえば本稿の「入寺疏年表」には、A～C型までを表示し、D～Eは基本的には表示しなかった（但し、A～C型のセットとなる場合は表示。注1）。

「入寺疏年表を通覧して」

本稿の「入寺疏年表」（〃有序〃分、年期判明分）を通覧して、気付いた点を挙げてみよう。

［1］先ず本表で設けた［序］欄を通覧するに（序のある場合は○印）、入寺疏の表題には〃有序〃などと表記されていないが、実際には序をもつ例が多いことである。特に集（入寺疏の集）において、序をもつ入寺疏の場合は概して表題の末尾に〃有序〃～并序（叙）〃と表記されているが、その表記がない場合も点検するに序をもつ例が意外に多い。

［2］入寺疏は、原本・原本写―A型・（A）型―の例からするに、もともと基本的には殆ど序（叙）があったと察せられる。

［3］現存の入寺疏で―疏（本体、駢儷文）部分は同じだが―、一方には序があり、一方には序がない場合が見られる。斯様な場合、もちろん元々は序をもっていたといえる。実例として、二つほど挙げよう。

（例1）永享七年（一四三五）、宝山乾珍住天竜寺江湖疏の場合（「入寺疏年表」No.59　以下、No.はこの年表による）

○　これが、『疏藁』四では次のようにある（未刊）。原本写―（A）型である。

宝山入寺　篤信仲作　江湖銘記寺名

卦十三二四十八

江湖、宓覩、

前相国宝山大禅師、罷万年席迁居鹿苑、

大相公以其位猶弗称徳、特降

台帖、董滌

霊亀山天龍資聖禅寺、可謂至公之盛挙也、於是江湖之士、洛社之朋聞斯栄除、不勝慶慰、聊具俚語以伸賀忱云、

崑崙水自天而下、其源高哉、（中略）、共惟、

新命天龍宝山大和尚、宗姓倶高、禅詩両熟、（中略）、渭巣叟三千六百之釣、風坐緑蓑、

永亨［享］竜集乙卯（七年）冬十月　日疏

前東福心交与可芬陀（中略、署名者一〇名アリ）

前安国明篤　信仲宗鏡軒　＊

（＊信仲明篤は、この江湖疏の製作者として、末尾に署名した）

○　ところが『疏藁』一では、序は見えないが、疏（本体、駢儷文）の部分は同じで、表題の下に年月が記され、いわば（D）型である。

宝山住天龍江湖　永亨［享］乙卯十月　信仲製

崑崙水自天而下、其源高哉、（中略）、某、宗姓倶高、禅詩両熟、（中略）、渭巣叟三千六百之釣、風坐緑蓑、

疏（本体）の部分だが、立ち入って見るに、右の『疏藁』四において「共惟、新命天龍宝山大和尚（具体的僧名）」～八字称である箇所が、ここでは「某」～八字称となっている。八字称の箇所で、発句「共惟」と具体的僧名（「新命～」）が消滅している。これも、入寺疏が変容していく一般的傾向だといえる。

○　さらに『晦庵稿』（信仲明篤の疏集、『続群書類従』巻八三二―二八輯下所収）では「鹿苑宝山和尚住天竜江湖疏」が収録されているが、そこでは疏（本体、駢儷文）の部分のみで、序や年月日については見えない。入寺疏としては、D型だといえる。

○　この江湖疏は、信仲明篤（～宝徳三年＝一四五一、聖一派）が製作したものだが、これ―特に『疏藁』四所収―を史料として綱文を付ければ、永享七年（一四三五）十月条「宝山乾珍、天竜寺住持ト為ル」となる。『大日本史料』七編（以下、「史料七編」などと略称）は未刊時期。なお『大日本史料』（史料編纂所）では、伝統的に法諱を主体として、綱文「乾珍宝山、天竜寺住持～」となろう。

（例2）文明十四年（一四八二）、天隠龍澤住建仁寺入寺疏の場

合（No.103）。この場合、諸種の入寺疏（山門疏、道旧疏、同門疏）について見られる。

○　先ず山門疏だが、『天隠（和尚）語録』（建仁寺両足院所蔵、五山新五）に次のようにある。これは、B型だといえる。

東山建仁禅寺　山門、欽奉　大檀那鈞命、敦請　前真如天隠大禅師、住持　本寺、為国開堂演法、祝賛　皇図無疆者、

右宓以、本色難逢、喩斉晋四六之指、（中略）、共惟、新命堂頭和尚天隠大禅師、学究内外、識高古今、（中略）尽蟠桃窮細柳、咫尺　天威、謹疏、

今月　日疏　　桂林（徳昌）製

ところが、この山門疏は、『桂林駢儷』では次のように見える。これは（D）型だといえる。

天隠住建仁山門　　壬寅六〔三〕月

本色難逢、喩斉晋四六之指（中略）、某、学究内外、識高古今、（中略）、尽蟠桃窮細柳、咫尺天威、

○　次に道旧疏だが、『天隠（和尚）語録』には次のようにある。これはB型である。

道旧、茲審、前席真如天隠禅師、栄中　大檀越准三宮鈞命、視篆　東山建仁禅寺、於是、吾輩以道義講習者、聞茲盛挙、不勝抃躍、胥率製疏、以勧其駕云、

慈恩昔造玄賛、打翻経館打裡之鐘、（中略）、共惟、新命建仁天隠禅師、錦心繡口、雪鬢霜鬚、（中略）、元豊会似見唐九老、耆英漸稀、

文明龍集壬寅三月　日疏

この道旧疏は、『桃源疏』（積翠文庫旧蔵）では次のように見える（史料八編二十九―一四四ページ）。年月日部分や序部分が全くなく、疏―本体―のみの、入寺疏として完全なD型だが、これは、いわば散らし書きで、字配りが示され、駢儷文（入寺疏の本体）のスタイルの実態が一目瞭然である。八字称の発句の箇所が例のように変容している（「共惟、新命～禅師」→「某」）以外、疏の本体（駢儷文）は全く同文である。

天隠（龍澤）住建仁道舊

慈恩昔造玄賛、　打翻経館裡之鐘、
天隠初改黄衣、　受宣詔亭前之牒、
五千蔵掃空義学、　四十年収取声名、
時可矣乎、　道所存也、
某　錦心綉口、　雪鬢霜鬚、
胸中波瀾、　馬遷（司馬遷）得形班固得影、
眉上風雅、　魯直（黄庭堅）以奇子瞻（蘇軾）以新、
北岳既勒移文、　東山特起高臥、
廼父誓不出世、　首座現優跋於百花、
此郎幡然為人、　開堂聞木犀於三月、
公侯貴戚冠蓋相望、　視聴言動礼楽一新、
建中士如致魯諸生、　時論為歎、
元豊会似見唐九老、　耆英漸稀、

因みに、駢儷文のことを四六駢儷文・四六文というが、ご覧のように実際には、八字称（四字の直対）以外、何も

四字・六字の対句（直対、隔句対）のみではない。

○　また同門疏だが、同様に、B型（〃文明龍集壬寅三月日疏〃、『天隠（和尚）語録』所収）とD型（『桂子禅味』所収「前真如天隠和尚住建仁同門」）がのこっている。

○　そして、この（例2）については、入寺語録たる「東山建仁禅寺入寺語録」（『天隠語録』所収）の冒頭に「師於文明十四年壬寅二月廿一日、就（建仁寺）大昌院受請、同三月十六日入寺」と明記されており（No.103b）、ここに文明十四年三月十六日条「幕府、天隠龍澤ヲ建仁寺住持ト為ス、是日、龍澤入寺ス」なる綱文が与えられる。

［4］　さて同門疏の場合だが、同時に二つの原文（互いに別文）が残っている例が見られ（No.110）、珍しい。即ち『大日本史料』八編十七、文明十七年十二月八日条「（足利）義政、秀簫文玉ヲ周防永興寺住持ト為ス」に収録される、次の同門疏二つ―①②―である。即ち①は『半陶文集』（彦龍周興作、五山新四）所収の「文玉簫首座住永興同門」で、②は『翰林葫蘆集』（景徐周麟作、五山全四）の「簫文玉住永興」（同門疏）だが、①は（D）型（序はないが、表題の下に割書きあって年月を表記）、②はC型（序あり）で、お互いに別文、何しろ疏の本体（駢儷文）が全く別文である。

［林泉友社疏や法眷疏のことども］

入寺疏について、分類し解説したものに、無著道忠『禅林象器箋』（―第廿二類文疏門。注5）や玉村竹二『五山文学』（―第五章五山文学の表現形式。至文堂、昭和四一年）がある。しかし実例を収集～点検してみるに、若干問題点に気付くが、特に友社疏と法眷疏についてそうである。

先ず友社疏だが、玉村氏は「友社疏　新命の詩文の交友（友社）より、入院を賀する意味で出されるもの」と定義している（前掲書一四三ページ）。しかし〃友社疏〃―とりわけ序を残す―実例は一向に見当たらず（別稿「入寺疏の序について」参照）、〃江湖友社疏〃とか〃林泉友社疏〃〃山林友社疏〃〃江南友社疏〃の例が見られ、注目できる。

〃江湖友社疏〃とは、入寺疏で、その序の書出しを「江湖友社～」と明記したものだといえるが、これらは、いずれも対応する入寺語録においては拈「江湖疏」項と見える。江湖疏（書出し「江湖～」）の残存例も多い。このように江湖疏と江湖友社疏とは、区別が付きにくい。これらの点、別稿「入寺疏の序について」で記した。

さて『疏藁』四を繙いていたら、〃林泉友社疏〃（書出し「林泉友社～」）に遭遇した。実例として珍しい。文明十八年（一四八六）八月、桃源瑞仙が相国寺住持（九五世、『扶桑五山記』四）として入寺する際のものである（未刊。No.111d）。（A）型である。

桃源入寺　　月翁和尚製　　卦十四ニ五十

林泉友社、茲審、
前等持桃源禅師、栄膺
大相越鈞迂薫蒞
万年山相国承天禅寺、於是乎、有唱于列者曰、禅師蚤以童子
有奇名、於文安之末旦与小補翁友善、出則並轡、入則接社、
皆以文章鳴焉、及応仁乱、俱入円之飯山而読書、
准三宮特聞厥名羅而致之、時巳之春、補翁始今諸封於茲山、

固一代盛典也、禅師亦歴試清要、遂継踵於
大将拝賀之秋、蔚為法門游受（？）、孰不沐聖訓乎、凡我隠
居放言林泉締交之徒（？）、聞斯盛挙、胥率具疏、以伸賀忱
云、
王荊公方大拝請賦詩、入鐘山雪竹、（中略）、共惟、
新命相国桃源和尚大禅師、毘曇孔子、菩薩顔回、（中略）暁寒
生兮孤鶴怨、
文明歳舎丙午（十八年）秋八月
東村霊彦　京左徳昌（中略、四名アリ）　江介周鏡＊
岩栖院希世也、村庵事

＊江介周鏡とは、月翁周鏡（〃江介〃―近江の人、明応九年＝一五〇〇寂）のこと、この林泉友社疏の製作者として、末尾に署名した。

なお『禅林象器箋』には、玉村氏『五山文学』の場合とは違って、「友社疏」項はないが、却って「江湖友社疏」「林泉友社疏」項がある。

ところで『汝霖佐禅師疏』（五山新別二）において、㋑山林友社疏、㋺江南友社疏に出会った。いずれも、入寺疏として珍しい種目で、序も付いているが、年次に関する記事が見えないのは残念である（従って本稿の「入寺疏年表」には表示せず）。とにかく全文を掲げておこう。一応、いずれもC型といえる。

㋑　中心住（心翁中樹）越州黄梅山林友社疏
茲審、前瑞鹿（円覚寺）第一座中心禅師、欽奉
准三宮左相府鈞旨、住持　越州府伝衣△黄（山）梅禅寺、寺廼禅師之
師方外（宏遠）遠和尚創業之場也、今公府升其位、以為大方諸山之列矣、
因以　禅師之為舊住持、重請以蒞其席焉、凡在山林友社、不勝
踏舞之至、作疏胥賀云、
白蓮社中、懐哉　遠（梵遠）公遺躅、黄梅路上、咸謂道者再来、蓋知伝衣
有時、安得大徴無後、共惟、某、学渉百氏、名高諸方、盍嚢嶺表
之春、禅板挂呉頭之月、天龍之室、曽明西陸商量、瑞鹿之堂、以
奪南泉（普願）坐位、茲聞出世、式協輿情、今者是昨者非、器惟新人惟舊、
神機凛々立于方外乾坤、素髪蕭々嘯於越中巌壑、咸忻三会奕葉、
欵発一華清芳、将望梅林而止渇心、須食甘蔗以入佳境、力弘法道、
毋忘山林、

この㋑の疏の本体（駢儷文）は、ご覧のように、蒙頭（「白蓮社中～安得大徴無後」部分。四字・六字の隔句対、六字の直対から成る）をはじめ、過句（六字の直対、四句・六字の隔句対）や結句（四字の直対）にも四字・六字の対句が多く見え、典型的な四六文から成っている。この点、次の㋺についても概ね同様だといえる。

㋺　夢菴（頭一）住聖福江南友社疏
関西之名于法窟者、以十数、而築之聖福、乃厥位居叢、蓋以聖
朝禅林之始也、是故、主斯席者、睥睨五山軻軌諸子、蕩々乎道
徴、洋々乎声名、擩溢人之耳目、然後以称弗曠厥職也、我友径
山蔵主夢庵禅師、承　公府之命、住此山聖福、曰導師得人也、
凡在江南而同其苦甘者、皆不勝欣抃之生（衍カ）至、闔辞致△賀云、
関西法窟、諸方独推此山、済北宗風、自古必有其主、蓋才固自天
所命、矧道亦由地而行、共惟、某（峰明本）、普応親孫、宝浄嫡（無隠元晦）子、道契
明主、安車入九重門、生還故郷、長風破万里浪、非惟名斉北斗、
抑亦化被西人、心無町畦、行有規矩、十年閉戸示幽独、尚懐哉往
時、九州拭目瞻清光、有待於今日、万言万当勤勤（勤）駕、一貴一賤奚

忘交、渭北春天遠夢、長隨蝴蝶、江南埜水寒盟、独似鷺鴎、

聖福寺は十刹（博多所在）。この序の後半部分（「我友径山蔵主夢庵禅師」～）からして、夢庵顕一が中国に渡って「径山」の蔵主となるなど「江南」で活躍したことが示されている。いうまでもなく「径山」とは、中国五山の第一であり（径山興聖万寿禅寺）、その所在地（杭州臨安府、浙江省）は、特に「江南」の中心部であった。この「夢庵住聖福江南友社疏」の作者汝霖妙佐は、顕一の友人だが、当時、なお中国滞在中（応安元―永和四、一三六八―七八）で「江南」の地で活躍中である（蘇州の承天寺で書記などして）。ここで「夢庵住聖福江南友社疏」とは、一足先に日本に帰国して聖福寺住持となる夢庵顕一に対して、「江南」にのこった汝霖妙佐が作成した「友社疏」だと解されよう。

なお夢庵顕一は、聖福寺の三九世で、南北朝後期、今川了俊（貞世）の九州探題期である。またこの㋺に対応する入寺語録「夢庵一禅師住安国山聖福禅寺語」（但し年月日なし）が残り（建仁寺両足院『逸録本邦古徳入寺語』所収）、これに拈「江南友社疏」項や「探題香」項が見え、注目できる。中国側でも、「江南友社疏」の例は一向に見当たらない（山口「博多禅院入寺関係未刊史料」―『九州史学』一二一号、一九九八年八月）。

ところで法眷疏について、玉村氏は、『五山文学』（前出）で「同門（法眷）疏　新命の同門の友が、その入院を勧め慶賀する意味を以て書かれる」（一四三ページ）とするなど（注6）、同門疏と法眷疏とを同じと見るが、無著道忠『禅林象器箋』（―第廿二類文疏門、前出）では、この両者（同門疏と法眷疏）は別として、法眷疏と法親疏とは同じとし、それぞれ独立項目を立てている。

同門疏については、既に別稿「入寺疏の序について」（前出）で具体的に考察、その特徴も指摘した。一方、法眷疏については、考察できなかったが、特に原本や原本写―A型・(A)型―でその例は管見に入らず、とにかく実例が少ない。僅かだが、実例を見よう。

（例①）貞治五年（一三六六）六月、義堂周信が相模善福寺住持として入寺する（空華日用工夫略集同年五・二三条、六・一条）際の法眷疏である（No.13b）。『大本中禅師疏』（諸師疏語集所収　法眷）に見える（『信濃史料』六―四六一ページ参照）。序があり、C型といえる。

義堂住善福并序

茲審、鹿峯（円覚寺）首座義堂信公、謹奉帥府鈞旨、住持相之善福禅寺、顧祖庭秋晩之際、先師門風未就凋弊、蓋天幸也、而又得公之出世、益有光于吾党、緝詞以慶、先師遺澤、幸如混々之源泉、（中略）、某、籌室先登、叢林表率、（中略）、伯吹塤仲吹篪、相期同調、

これに対応する入寺語録「相州海雲山善福禅寺語録」（『義堂和尚語録』所収、史料六編二十七―二九九ページ）だが、その冒頭に「師於貞治五年丙午五月二十二日、在円覚首座寮、受相府請、六月一日入院」とあり、また文中に拈「法眷疏」項が見える（No.13a）。

（例②）その後、この義堂周信が建仁寺住持となった際の法眷疏である（No.16b）。『汝霖佐禅師疏』に「信義堂住建仁江湖・法眷二疏」が見え（五山新別二―五五二ページ）、うち法眷疏のみが序を備えている。次の通りで、C型である。

又　法眷疏、代普明国師（春屋妙葩）、

法眷疏

茲審、前善福義堂禅師、爰承　公府之命、住持東山建仁禅寺、凡在同門黄童白叟、咸不勝欣抃、具疏以胥慶、情見乎詞也、

黄蘗之道、得南華以相伝、（中略）、某、籌室夏游、宗門迂固、（中略）、永見瓜瓞綿々、

これには年次が記されていないが、対応する入寺語録は「住京城東山建仁禅寺語録」（『義堂和尚語録』所収、大正蔵八〇）だといえ、その冒頭に「師以康暦二年庚申二月十九日、在相陽報恩禅寺、受右府請、四月四日入寺」とあり、また文中に拈「江湖疏」「法眷疏」項が見える。

これは、『大日本史料』六編未刊の時期だが、ここに、綱文として康暦二年（一三八〇）四月四日条「義堂周信、建仁寺住持ト為リ、是日、入寺ス」を与えよう。

（例③）『璵東陵日本録』（五山新別二）に、つぎのような中岩円月住建仁寺法親疏とも称すべき史料が含まれている（No.10 b）。これもC型だといえる。

法親　茲諗、

前萬壽堂上中岩和尚賢属禅師、榮膺公選、補処東山建仁禅寺、忝当法眷、是用織詞以勧、小表芹意云耳、（中略）、恭惟、某人、雷霆頰舌、錦繡胸襟、（中略）、深慰老懐之望、

これは年次が記されていないが、対応する入寺語録は「仏種慧済禅師住東山建仁禅寺語録」（『中巌和尚語録』所収、五山新四―七一四ページ）だといえ（No.10 a）、その冒頭に「康安二年壬寅四月十九日入院」とあり、文中には拈「法眷疏」項があり、ここに法親疏＝法眷疏といえよう。

なおこれは、『大日本史料』六編既刊の時期で、該当箇所（六編二十四）に貞治元年（康安二年、一三六二）四月十九日条「是ヨリ先、幕府、円月中巌ヲ建仁寺住持ト為ス、是日、入寺ス」があって関係史料が掲載されているが、これら入寺語録と入寺疏は、ともに不収のようなので、最も基本史料として追加できる。

（例④）ところで『瑞渓疏』（五山新五）に、次のような「照中熙首座萬壽法眷并叙　応永己亥（二十六年）」が含まれている（No.41 b）。全文を示そう。（B）型といえよう。

照中熙首座住万寿法眷并叙　応永己亥（二十六年）

竊以、

大檀越大人（足利義持）相公、特起

照中禅師於越之蔵勝精舎、董莅

京師万寿禅寺、禅師分座天龍之後、古寺掩門久矣、寔湖海遺老也、先是拒　相府寵命至于再、今茲幡然而起、夫盛挙之不次、而応世之有時、孰不慶也耶、凡瓜葛乎法系者、忻抃弗已、遂駢四儷六、以勧之云、

野無遺賢、起臥龍於三顧、朝用好漢、聴大鳥之一鳴、既能驚人、宜任済世、某、気呑仏祖、目視雲霄、昔游関心、快挹西山之爽、晩節自養、甘居北海之浜、道声推重睦州（道蹤）、雅思想見越徹（宗徹）、錦囊三千首風月、口吻生花、衲被二十年星霜、心腸似鉄、超遷可謂白衣修撰、甲子矧同絳県老人、全提芥室（春屋妙葩）真宗、一唱琴臺古曲、龍華春遍、爰竢慈氏下生、鰲店雪寒、

有懐曽郎成道（雪峰義存）、

ご覧のようにこの「法眷」疏は、特殊な形態で、叙（序）はあるものの、末尾に年月がない点ではC型だが、表題の下に年次を記したことを考慮すれば（B）型だと位置付けておこう。

これは、『大日本史料』七編未刊の時期、ここに、綱文として応永二十六年（一四一九）是歳条「照中□熙、万寿寺住持ト為ル」を与えよう。そしてこの法眷疏の序を見るに、「瓜葛乎法系者～」「遂駢四儷六」なる字句に注目できる。別稿「入寺疏の序について」で指摘したように、「瓜葛乎法系者～」は同門疏の序に頻見される。また同門疏は「新命」者に「法兄」の字句が付けられている（序と八字称の部分）のも特徴だといえるが、ここ（法眷疏）ではその字句は見えない。一方、この序の末尾（――傍線箇所）で「（遂）駢四儷六」なる字句が見えるが、斯様な例は『流水集』（五山新三）所収の入寺疏序の末尾において多い。勿論これは〝四六駢儷〟の意だが、因みに入寺疏序の末尾に「駢儷」「儷語」などと見える例は『続翠稿』（五山新別一）で散見される。

以下、個々のことについて若干だが、入寺疏の序を読んで他に気付いた点に触れておこう。

［東福寺入寺に際しての、檀那関白家と将軍家］

『起山和尚語録』（内閣文庫所蔵）に、永徳二年（一三八二）、起山師振が東福寺住持（四八世）になる際の入寺疏（山門疏、諸山疏―序や年月あり）と入寺語録（年月なし）が収録されている（No.17）。いずれも未刊のようである。

先ず山門疏だが、次のように見える。B型である。白文なので、適宜、読点を施そう。

恵日山東福禅寺
山門、欽奉
大僧禄［録］　智覚普明国師法旨、以聞
大檀那前関白殿下并
左相府兼右幕府　征夷大将軍、　敦請
前住真如起山和尚大禅師、本寺住持、於是海衆歓
然緝詞而具疏以請、為国開堂法祝延、
聖壽萬安者、奥［粤カ］以宰臣懸藻鑑、（中略）、恭惟、
新命堂頭和尚大禅師、単傳有自（？）、大用無方（中略）祝延
天齢、　謹疏、
永徳二年二月　　日疏　　元章和尚＊

（＊この山門疏の作者は元章周郁で、夢窓疎石の法嗣、至徳三―一三八六年寂）

次に諸山疏を見よう。やはりB型である。

諸山、茲審、前真如起山禅師、栄膺
智覚普明国師大僧録選挙、特奉
九條前関白殿下台命、欽承
左相府兼右幕下殿下鈞旨、住持
恵日山東福禅寺、凡我隣封縦臾
勧駕者也、
右伏以、抱荊山璞経（中略）恭惟、新命堂上起山大和尚、九州

間生、三聖貽厥（中略）我輔車　謹疏、

永徳二年二月　　日疏　　一菴和尚＊

（＊この諸山疏の作者一菴は、天祥一麟のこと―一菴は室号―である。応永一四―一四〇七年寂。関白九条道教の子息。玉村『五山禅僧伝記集成』講談社刊）

これら山門疏・諸山疏に共通して見える「大僧録」の「智覚普明国師」は初代僧録（康暦元年＝一三七九就任～）・春屋妙葩のことで、「大檀那」の「九條前関白殿下台命」とは東福寺の檀那たる前関白九条忠基（関白在任は永和元～康暦元年、一三七五～七九）の〝檀那帖〟を指し、また「征夷大将軍」の「左相府兼右幕下殿下鈞旨」とはもちろん当時の将軍・足利義満（永徳二年正月「左大臣」）の〝公帖〟を指そう。ここで僧録・春屋妙葩の立場・任務はともかくとして、この時期（永徳二年、一三八二）に、これら入寺疏で東福寺入寺について関白家〝檀那帖〟～将軍家〝公帖〟の順で表記されているのは注目できる。

これに対応する入寺語録「起山和尚住東福寺語録」（『起山和尚語録』所収）を繙くに、「拈帖（檀那帖）」～拈「武箚（公帖）」が見え、やがて「祝香」（「今上皇帝祝延」云々）～「檀那」香（「為本寺大檀越前関白殿下増崇禄算」云々）～「将軍」香（「為　征夷大将軍左僕射幕府資延禄算」云々）～「嗣香」とあって、ここでも、右の入寺疏（山門疏、諸山疏）の場合と同様、東福寺入寺について檀那・関白家～将軍家の順序に表記されている。

嘗て入寺語録を全体的に考察した際、一般に入寺語録は祝聖香～将軍香の順だが、東福寺の場合は特殊だと指摘した。即ち東福寺入寺語録の場合、応安二年（一三六九）十月、夢巌祖応が東福寺住持（四〇世）として入寺する際の語録「大智円応禅師夢巌和尚住慧日山東福禅寺語録」（史料六編三十一）では、祝聖香（「為祝延今上皇帝聖寿無疆」）～檀那香（「為本寺大檀越前関白殿下」＝九条経教）～将軍香（「為征夷大将軍」＝足利義満）の順だったが、南北朝合一後のこと、応永十四年（一四〇七）十月、金山明旭が同寺住持（七〇世）として入寺する際の語録「金山和尚住慧日山東福禅寺語録」（『大道和尚語録』所収）では、「拈帖」（公帖）～「拈帖関白殿下」（檀那帖）の順（公帖・檀那帖ともに原物が現存）であり（No37a）、また同十八年二月、岐陽方秀が同寺住持（八〇世）として入寺する際の語録「住慧日山東福寺語録」（史料七編十四）においては、拈「相府帖」（公帖。「大相公」文言あり）～拈「檀那帖」の項があり、拈香部分では「祝聖香」～「相公香」（「為大檀越征夷大将軍」＝足利義満）～「檀那香」（「為大檀那関白殿下」＝一条経嗣）の順であり、要するに将軍香が檀那香の上位になっている（山口「入寺語録の構造と年表」―『東京大学史料編纂所研究紀要』八号、一九九八年）。

ところで、ここに見た『起山和尚語録』の例―永徳二年（一三八二）は、この間のこと、特に入寺疏（山門疏、諸山疏）の序を紹介できたことによって、東福寺入寺については、嘗て指摘した時期（応安二年、一三六九）より晩くまで檀那・関白家～将軍家の順で表記されていると気付いた（補注）。

〔将軍不在期の入寺疏〕

①『瑞渓疏』（五山新五）に、次のような入寺疏―道旧疏が収録されている（No63a）。C型といえる。

江西（龍派）和尚住南禅道舊疏并序

宓以、伝曰、得賢則能為邦家立太平之基、嘉吉辛酉（元年）秋、右京兆源公、以
大檀越猶幼、摂行公府事、特擢吾門諸賢、授之其位、凡望刹在
洛者、同日帖降、於是乎、
前席建仁江西大禅師、褎為挙首、起於霊泉先廬、視篆乎
五山之上瑞龍山太平興国南禅〻寺、此位極品、師徳称焉、人境
相得、世無異論、不亦韙乎、顧国家盛衰、係乎得賢与不得、則
今此一挙、亦豈非立太平基之謂也耶、吾輩以道義講習日久矣、
不勝鳧藻、緝詞相賀、〻師所以賀国家之盛也、
苦熱念西風、久恐良時難得、文星照北斗、忽喜晩遇有光、来何暮
耶望者顒然、変則通耳天之常也、共惟、
新命南禅江西大禅師、学閲三教、名喧四朝、罵天謁（大慧宗杲）張相（張九成）公、曽論
此事、吟佛逢韓京兆、今受其知、千光後七葉益昌、五岳上三世相
継、舊時暫寓龍蟠水秀、此日重来鳥語山開、金錫飛而入淮軍、雖
誇行化、塔鈴語而投趙将、何若坐籌、唱彼太平之歌、和以知足之
曲、不二場説三域、雨華方新、無雙手第一枝、月桂未老、青雲記
同年面、白髪鬪見在身、

この序に「嘉吉辛酉（元年）秋、右京兆源公（細川持氏＝右京大夫）、大檀越（足利義勝？）猶幼、摂行公府事、〜同日帖降」とあり、注目しよう。この時期は、周知のように嘉吉元年（一四四一）六月のこと足利義教（室町幕府六代将軍）が赤松満祐に暗殺されて（嘉吉の乱）、翌二年十一月に義勝（義教の長男）が将軍に就任するまで、将軍不在である。この序は、この時期の幕政について的確に表記している。即ちこの時期は、ときの管領が将軍に代わって「摂行公府事」という状況で、その一つとして「帖降」―公帖発給（恐らく管領奉書＝幕府御教書による「住持職」任命）をなしていたと読み取れる。この際の〝公帖〟（管領細川持氏奉書）の原文は管見に入らないが、『建内記』嘉吉元年八月二十三日条に「今日、南禅寺入院也、江西（龍派）和尚云々、於管領許見及了、当代智徳高僧也」（大日本古記録『建内記』四）などとある。

『大日本史料』七編未刊の時期。これらを基本史料として、嘉吉元年八月二十三日条「幕府、江西龍派ヲ南禅寺住持ト為ス、是日、龍派入寺ス」なる綱文が与えられよう。江西龍派は南禅寺一四四世（本稿で、五山各寺の世代表示は概して『扶桑五山記』による）。

②さて『続翠稿』（五山新別一）に、次のような江湖疏が収録されている（No.64 b）。この冒頭部分、即ち序と疏のはじめの部分（蒙頭、八字称）を示してみよう。これもC型である。

虎山（永隆）住相国

竊承、壬戌（嘉吉二年）春、副枢府京尹（細川持之）源公、欽奉
府命、特起　前等持大禅師虎山和尚於鹿苑精舎、住持　万年山
相国承天禅寺、吾党咸喜曰、偉哉茲挙、禅師乃鹿苑相公（足利義満）之遺体、
而為　先相公（足利義教）之貴弟也、鹿苑為都僧録司、而宗門之元気、在於
茲也、矧前年、先相公、捨我蒼生、而今　嗣公（足利義勝）尚幼、雖有碩望
之輔、列其左右、亦有借陰重於　禅師余力之暇、則不翅為柄宗
之重、実其為国家梁倚之寄也、其徳盛矣、則茲挙、匪宗門之私
慶、固朝議攸率従、豈不偉哉、於是凡在江湖、欲緘弗能、輙製
駢儷、少抒賀忱云、

黄金鋳印　争如心印之伝宗
華衮為衣　豈及信衣之有記
知軽重固丈夫也　　法門阿衡
合進退其聖者乎　　某　　慈済宝筏

この江湖疏の序の冒頭に「壬戌（嘉吉二年）春、副枢府京尹源公（細川持之）、欽奉府命、特起　前等持大禅師虎山和尚於鹿苑精舎、住持　万年山相国承天禅寺」とあって、この嘉吉二年（一四四二）春、「府命」を奉じた「副枢府」たる細川持之の発給文書によって、虎山永隆が相国寺住持に任命された。もちろん「府命」とは将軍（不在ながら）の意向（〝仰〟）、「副枢府」とは管領を指す象徴的表現であり（幕府でのナンバー・ツー）、ここに管領細川持之は管領奉書の形式で〝公帖〟（住持職任命書）を発給したといえる。虎山永隆は、右の序の記事からも窺えるように、実は足利義教の弟、即ち義満の子息であり、当時、相国寺鹿苑塔主として〝僧録〟のことを司っていた（玉村『五山禅僧伝記集成』―「虎山永隆」項）。

ところで『扶桑五山記』四―相国寺住持位次を見るに、「五十四　虎山禾上、諱永隆、嗣常光（空谷明応）、嘉吉二年正月十九日、領管領堂（ママ）帖、不入寺、同二月十八日寂、壽四十」とある。虎山永隆は相国寺住持五十四世として、嘉吉二年正月十九日付の「管領帖」（管領発給の〝公帖〟）によって任命されたが、「不入寺」だった由。一方、『相国寺前住籍』（内閣文庫所蔵）では、彼は正式には世代に勘定されず、第四十三世（東岡周嶧）と第四十四世（芷陽周沅）との間に、「虎山和尚、諱永隆、嗣常光国師（空谷明応）、嘉吉二年壬戌正月十九日、領公文、換両班、不住、同年二月十八日入滅、壽四十」と見える。ここに永隆は、要するに、嘉吉二年正月十九日付の管領発給の「公文」（公帖）を受領したが、実際に相国寺には「不入寺」＝「不住」だったのである。

嘗て触れたことだが、相国寺の「不入寺」の場合、『扶桑五山記』では世代に入れているが、『相国寺前住籍』ではそうではないので、双方で世代の数え方が大きくズレて行く。また「不入寺」などと表記されていても、実際には、入寺疏や入寺語録の本文が残っている例が見られる。この嘉吉二年の虎山永隆住相国寺の場合も、「不入寺」に拘らず、入寺疏として、右に提示した江湖疏のほか、諸山疏（序あり、未刊。『晦夫集』所収）も残っている（末尾「入寺疏年表」参照。山口「扶桑五山記の一考察―五山住持入寺年表―」―『長崎大学教育学部紀要　人文科学』六二号、二〇〇一年三月）。この辺の実態については、もっと検討すべきなのかも知れない。（注7）

〔（入寺疏）序の長文化と辺境禅院―日向大慈寺の例―〕

日向・大慈寺は、中央からは遠隔地だが（現、鹿児島県曽於郡志布志町）、南北朝期（十四世紀半）に諸山となり、室町期（十五世紀半、文安元年）には十刹になった禅院（聖一派）である。景勝地で、『扶桑五山記』において境致として〝八景〟と〝十境〟とを併有する唯一の例であり、南北朝後期に九州探題今川了俊の意向が働き成立した「大慈八景詩歌」（漢詩と和歌）を残している。中世日本の代表的八景詩歌といえ、これらの点、次に提示する室町期の『霊松集』の住大慈寺山門疏の序でも特記されている。

『霊松集』は、著者の季亨玄厳（長禄元年＝一四五七寂、聖一派）が何しろ日向国出身だということもあって、日向～九州関係のものが多く収録され、日向大慈寺関係の入寺疏七点も含まれている。これらは、何れも未刊だったので、嘗て拙稿「日向大慈寺入寺疏と京城諸山疏・相城諸山疏」（『宮崎県史研究』一一号、一九九七年）で紹介～翻刻し、詳細にコメントしたつもりである。

この入寺疏七点（山門疏六点、法眷疏一点）のうち、次の二点は序をもち、この部分の記事は詳しく且つ地域性をもっていて、内容的に極めて興味深い。あらためて考えよう。

①成器西堂住日州大慈山門疏　寺位陞十刹　（No.70）
②快翁剣西堂住日州大慈山門疏　西来院門徒　（No.80）

ともに山門疏で、C型の典型である。ここで②の原文を提示しよう。

日本国龍興山大慈廣慧禅寺山門疏　有序、

夫日域者、神国也、密教流伝之地而大乗醇化之域也者、神宮在天、下見大海、有大日印文、下天鉾以搜印文、其鉾滴如露迸散而為国、名曰豊葦原中津国、神宮之孫瓊杵尊受　天照大神勅、自天而降于此国、時向日之出方、故名日向国也、其饗国者、是謂天神七代、地神五代也、人皇第一国主、神武天皇者、鸕草神第四之子也、四十六歳、始登皇位、都于日向国、故日向者、日域皇都之始也、謂之宮崎京、実辛酉之歳也、吾龍興山大慈禅寺、乃五山之上南禅開山　大明国師（無関玄悟）法嗣　玉山大禅師（玄提）最初行道之地也、慧日（東福寺）附庸而歯于諸山、有季矣、建億万年之基業而入新八景之佳境、耆宿英納（納）、公卿大夫、能詩歌者、各賦八景、其事緒見于空華老師（義堂周信）之序、二条摂政（良基）之跋、寔為九州第一之望刹也、文安元季甲子之秋、大檀越日隅薩三州史君（島津忠国）藤公白相府、陞其位、以為大方十刹之列矣、宝徳辛未（三年）之冬、見缺主席、欽奉　鈞旨、延請　前住長興快翁禅師董莅本寺、為国開堂、専祈一人丕図者、

神武帝立都、懸堯日向此国、正法明現刹、有僧龍興吾山、匪人皇之最初乎、固仏法之夙記也、某人、定光三世、大覚五伝、問西来而会祖師禅、柏樹成仏、行東魯而学儒士術、杏壇思人、破沙盆発韶鈞之希声、生苔蒂索渾璞之高價、解嘲銕鑪歩、正印誰伝河東文章、取諱金剛王、真宗能続済北命脉、鈞帖既降、輿情攸帰、万頃波上青螺、蓬莱可到、七里灘頭明月、珊瑚有光、爰整宗綱、式祝　皇祚、

この序の末尾部分「宝徳辛未之冬～一人丕図者」は、字句からして、山門疏の序の原形を遺しているといえ、ここに宝徳三年（一四五一）「是冬、快翁□剣、日向大慈寺住持ト為ル」なる綱文を立てられる。

この序において末尾以前の部分は、序の原形は遺していず、詳細で、多面的内容である。「文安元年甲子之秋～以為大方十刹之列矣」の部分は、実は①成器西堂住日州大慈山門疏（寺位陞十刹）の序にほぼ同文が含まれ、これに対応する文安元年（一四四四）八月六日室町幕府御教書（管領奉書）の原文も残っている（日向大慈寺文書）。「大檀越」たる南九州三カ国（日向、大隅、薩摩）の守護大名島津忠国が「相府」＝幕府側に申請したことにより、当寺は諸山から「十刹」に昇格したのである。ところで、この②快翁剣西堂住日州大慈山門疏の序において特筆すべきは、日向神話と「大慈八景詩歌」に関する詳細な記事である。先ず冒頭にいわゆる日向神話（天孫降

臨〜神武天皇）の骨子を記述し、ご覧のように、さらに疏の本体（〝蒙頭〟部分）にまで食い込んで「神武帝立都〜固仏法之夙記也」と記し、『霊松集』の著者季亨玄厳は出身地日向国を自ら顕示している。大慈寺八景については、〝空華老師〟（義堂周信）による「大慈八景詩歌集叙」や特に〝二条摂政（二条良基）之跋〟に触れ、当寺を「為九州第一之望刹也」と記している（注8）。いずれにしろ、これらの部分は、『霊松集』たる集（入寺疏の集）が編集される際に、諸史料によって合成されたものだといえる。

＊　＊　＊

今回は、この辺で具体的考察を打切ろう。入寺疏の序について、全体を通覧するに、A型・B型入寺疏の序は短文で、これらは概ね原形―基本形だといえる。別稿「入寺疏の序について」（前出）で扱った入寺疏の実例は、文明年間―戦国期入ってからのB型のものも多かったが、それらの序は短文で原形を遺している。ところが実例の多いC型の序はしだいに長文化、これらは、集（入寺疏集）作成に際して諸史料を参照して編集、詳細化し、当時の政治社会的状況など知る上では極めて有難いが、元来の序（原形）からはかなり変容したものといえる。何しろ、末尾の連署部分や年月日部分（〝年月日疏〟）を削除している。しかし兎も角、入寺疏の本体―駢儷文部分―は、A型〜E型を問わず、ずっと原形―原文のまま書写・伝来されて来たといえる。

ここ十年ほど、入寺語録や入寺疏について、年表を作成しつつ、文体や構造など諸様相の考察に努めて来た。ここに、ともに史料群として、自ずと文献史料の一範疇として主張できる段階になれば幸いである。

注

（1）例えば、貞治二年（一三六三）十二月の傑翁是英住相模浄智寺の場合、数種の入寺疏（山門疏、相城諸山疏、京城諸山疏、江湖疏―『傑翁録』。「傑翁西堂住浄智諸山疏」―『東海一漚集』所収、五山新四）や入寺語録「住相州金宝山浄智禅寺語録」（「貞治二年臘月二十六日入院」―『傑翁録』所収、史料六編二十五）が遺されているが、これら入寺疏には何れも序が見えないので、本表「入寺疏表」には表示しなかった。また文明十二年（一四八〇）九月、正宗龍統住建仁寺の場合も、同様に数種の入寺疏（山門疏、諸山疏、江湖疏―『桂林駢儷』『蔗庵遺藁』『雪樵独唱集』）や入寺語録「正宗和尚住東山建仁禅寺語録」（「文明十二年庚子八月二十五日、在東山護国祖塔、受相府請、九月二十七日入院」―『禿尾鉄苕帚』所収、五山新四）があるが、これら入寺疏いずれにも序が見えない。斯様な場合については、一切、本表「入寺疏年表」には表示しなかった。

ところで文安三年（一四四六）二月の瑞巌龍惺住建仁寺の場合は、同様に数種の入寺疏（山門疏、道旧疏、江湖疏、友社疏、同門疏―『蟬菴稿』『心田播禅師疏』『瑞渓疏』など）や入寺語録「瑞巌和尚建仁禅寺法語」（『瑞巌和尚語録』所収）があり、これら入寺疏には殆ど序が見えないが、ただ一つ同門疏に序が見えるので（『続翠稿』所収、五山新別一）、本表に、対応する入寺疏と入寺語録についても全て併せて表示した（No.71）。

（2）因みに西尾賢隆氏は、長年、入寺疏など禅宗関係駢儷文について丁寧な論考（特に平仄―押韻の確認、読下し文、語釈―典拠提示）を重ねられ、最近には例えば「竺仙梵僊の墨蹟」（花

園大学『禅学研究』特別号、二〇〇五年）がある。

（3）『疏藁』は全五冊、国立国会図書館所蔵。入寺疏（写）の集成で、殆ど未刊。特にその四冊目（『疏藁』四）に収録される分は、より原物―原文に忠実な写しだといえ、卦（―罫）を引き、改行―文字配列を原物のままとし、末尾に年月日（〃年月日疏〃）を入れ、さらに連署者―印を配列している。但し連署者の印については、注記はあるが、形状そのものは写されていない。要するに写本だが、影写本ではない。そして各疏の見出しに、罫のタテ・ヨコ（字数）を示し、製作者を表記している。

（4）因みに殆どC型を収める集（入寺疏集）において、より原形に近い（A）型やB型が散見される場合もあり、注目できる。例えば『半陶文集』（五山新四）―B型、（A）型。また『続翠稿』（五山別一）―B型。

（5）因みに『禅林象器箋』は、明治末期に刊行（明治四十二年―一九〇九、京都・貝葉書院）されて以来、久しかったが、近年、国内や中国から復刻本が出された。一九七九（昭和五十四）年―京都・中文出版社（禅学叢書として）、一九九六年―中国北京・河北禅学研究所（中国仏学文献叢刊として、新華書店北京発行所）。

（6）玉村「史料よりみたる五山文学」二八ページ（大東急記念文庫公開講座講演録『五山の学芸』所収、昭和六十年）でも同様。

（7）因みに斎藤夏来氏は、最近、特に『蔭涼軒日録』の記事分析を出発点として、室町中期の全国の五山系寺院（五山、十刹、諸山）住持補任について、その実態（入寺、坐公文）を多角的に考察し、魅力ある論考を公表している。斎藤「叢林と夷中―諸山・十刹の住持補任分析―」（『歴史学研究』七九一号）、「足利政権の坐公文発給と政治統合」（『史学雑誌』一一三編六号）。

（8）堀川貴司氏は、近年、上梓した『瀟湘八景―詩歌と絵画に見る日本化の様相―』（臨川書店、二〇〇二年）において（二三ページ～）、この②快翁剣西堂住日州大慈山門疏の序に注目され、あらためて大慈八景詩歌（漢詩と和歌）の貴重性や二条良基との関係を強調（クローズ・アップ）している。

（補注）ここに東福寺の場合、その入寺史料（入寺語録、入寺疏）によると、起山師振（永徳二年―一三八二年入寺）＝東福寺四八世までは檀那・関白家～将軍家の順で表記され、金山明旭（応永十四年―一四〇七年入寺）＝東福寺七〇世では将軍家～檀那・関白家の順に変わっているといえる。

ところで『不二遺稿』（五山全三）所収「旭日東住東福山門疏」（二九六九ページ）の序には、「平安城東慧日山東福禅寺、欽奉准三宮暨九条禅定殿下台旨、敦請前筑州聖福日東和上大禅師、住持本寺」とあって、この記事も注目できる。ここで日東祖旭は東福寺六一世、また「准三宮」とは足利義満（永徳三年―一三八三年六月に「准三宮」宣下）、「九条禅定殿下」とは前関白九条忠基（関白在任は永和元～康暦元年、一三七五～七九）を指す。東福寺入寺において、斯様な順序、即ち将軍家～檀那・関白家の順に変わったのは、この義満の「准三宮」化（永徳三年）を契機にしたと見ておこう。もちろん義満の権威化の一端である。

［付記］なお本稿（紀要）とほぼ同時に、二つの短文、即ち誘われて「長崎生活の六年」（『長崎大学玉園同窓会報』一一六号、二〇〇六年二月）と「長崎大学でのこと」（『長大へのメッセージ―平成十七年度定年退職者寄稿集―』二〇〇六年三月、長崎大学総務部総務課発行）を書いた。

〔入寺疏年表〕（〝有序〞分を中心として）

①鎌倉期

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
1a	1278	弘安1・12・23平時宗請帖、同2・8・21入院	仏光円満常照国師住日本国相州巨福山建長興国禅寺語録		仏光国師語録	大正蔵80		
		(弘安2・8・21)	無学祖元住建長寺入寺疏		仏光国師語録	大正蔵80		
b		①今月　日山門疏	①山門疏	○				(A)
c		②今月　日	②江湖疏	○				(A)

②南北朝期

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
2	1346	(貞和2・12・23入院) [賢俊僧正日記]	竺仙梵僊筆明叟斉哲住山城真如寺諸山疏	○	大徳寺竜光院所蔵	日本歴史389		A. 国宝 *
3a	1348	貞和4・10・1入山門	無涯和尚初住肥州鳳翔山能仁浄土禅寺語録		建仁無涯仁浩禅師語録	長崎大・教・社63		
b	1348	貞和4・10	無涯和尚住肥前[後]浄土寺山門（首欠）	○	禅刹記	長崎大・教・社63		(A) 柄語
4a	1351	観応2・8・19入寺	大元四明東陵和尚住日本国山城州霊亀山天竜資聖禅寺語録		璵東陵日本録	五山新別2	6編15	
b	1351	(観応2・8・19入寺)	(東陵永璵住天竜寺) 山門疏	○	璵東陵日本録	五山新別2	6編15	C
5a	1352	観応3・4・8入寺	東陵和尚住瑞竜山太平興国南禅々寺語録		璵東陵日本録	五山新別2	6編16	
b	1352	(観応3・4・8入寺)	(東陵永璵住南禅寺) 山門疏	○	璵東陵日本録	五山新別2	6編16	C
6a	1358	延文3・4・5入寺	無涯和尚住洛陽東山建仁禅寺語録		建仁無涯仁浩禅師語録		6編21	
b	1358	延文3・2・17	足利義詮公帖写(「建仁寺住持職事」)→無涯和尚		永源師檀紀年録		6編21	
c	1358	延文3・4疏	無涯和尚住東山建仁寺山門疏	○	禅刹記			B
7a	1359	(延文4・3)	放牛和尚住南禅山門・江湖二疏		東海一漚集	五山新4	6編22	D
b	1359	延文4・3疏	放牛和尚住南禅諸山疏	○	若木集拾遺	五山全2	6編22	B
8a	1359	(延文4・8疏)	南嶺子越住筑前聖福寺諸山疏	○	宇部市 東隆寺所蔵	日本歴史389	(6編22)	A. 重文
b	1359	延文4・8疏	南嶺子越住筑前聖福寺江湖疏	○	宇部市 東隆寺所蔵	日本歴史389	(6編22)	A. 重文
9	1359	延文4・冬	妙首座住上総州願成寺山門疏	○	中巌円月作品拾遺	五山新4		C
10a	1362	康安2・4・19入院	仏種慧済禅師住東山建仁禅寺語録		中巌和尚語録	五山新4		拈「法眷疏」
b	1362		中岩円月住建仁寺「法親」疏　東陵	○	璵東陵日本録	五山別2		C
11a	1363	(貞治2)・3・23入寺	仏観禅師住京城東山建仁禅寺語録		仏観禅師語録		6編25	
b	1363	貞治2・春、円月疏	青山慈永住建仁寺道旧疏	○	東海一漚余滴	五山新4	6編25	B
12	1364	(貞治3・10・12)	仙竺心住長楽江湖疏	○	空華集	五山全2	6編26	C
13a	1366	貞治5・5・22在円覚寺首座寮受相府請、6・1入院	相州海雲山善福禅寺語録		義堂和尚語録	大正蔵80	6編27	
b	1366	(貞治5・6・1入院)	義堂住善福并序（法眷疏）	○	大本中禅師疏、諸師疏語集所収	信濃史料6		C

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
14 a	1367	貞治６・10・３入院	仏種慧済禅師住相州巨福山建長禅寺語録		中巌和尚語録	五山新４	６編28	
b	1367	(貞治６・10・３入院)	月中巌住建長諸山疏	○	空華集、東海一漚別集	五山全２、五山新４	６編28	C
15	1372	(応安５・２)	起山師振住山城真如寺入寺疏		起山和尚語録			
a		①応安５・２疏	①山門疏　此山和尚	○				B
b		②今月　日疏	②洛城諸山疏　定山和尚	○				B
16 a	1380	康暦2・2・19在相陽報国禅寺受右府請、4・4入寺	住京城東山建仁禅寺語録		義堂和尚語録	大正蔵80		
b	1380	(康暦２・４・４入寺)	信義堂住建仁江湖・法眷二疏	法○	汝霖佐禅師疏	五山新別２		D、C
17 a	1382	(永徳２・２)	起山和尚住東福寺語録		起山和尚語録			
	1382	(永徳２・２)	起山師振住東福寺入寺疏		起山和尚語録			
b		①永徳２・２疏	①山門疏　元章和尚	○				B
c		②永徳２・２疏	②諸山疏　一菴和尚	○				B
18 a	1386	至徳３・10・26入寺、於鹿苑受請	山城州万年山相国承天禅寺語録		常光国師語録	大正蔵81		
b	1386	(至徳３・10・26入寺)	空谷和尚住相国諸山疏 有序	○	懶室漫稿	五山全３		C
c	1386	(至徳３・10・26入寺)	空谷住相国（江湖疏）	○	雲渓山禅師疏、諸師疏語集所収			C
d	1386	(至徳３・10・26入寺)	空谷住相国（同門疏）		諸師疏語集			D
19	1391	明徳２・11	鶚仲立住相陽浄智京師諸山疏	○	不二遺稿	五山全３		C or B
20	1393	明徳３・春	徹首座住（壱岐）安国寺（江湖疏）	○	惟肖得巌集拾遺	五山新２		C
21	1393	明徳４・春	明臾因首座住長安寺江湖疏并序	○	惟肖巌禅師疏	五山新２		C
22	1393	明徳４・秋	心岩住建仁同門疏并序	○	惟肖巌禅師疏	五山新２		C

③室町期

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
23	1395	乙亥(応永２)春	万寿首座寿大椿住但州安国同門疏 有序	○	不二遺稿	五山全３		C
24	1395	(応永２・是冬)	伯英和上住南禅京城諸山疏并序	○	惟肖巌禅師疏	五山新２	７編２	C
25 a	1396	応永３・８疏	浦雲座元入寺（住山城三聖護国寺山門疏）	○	疏藁４			(A) ＊
b	1396	応永３・８	浦雲座元入寺（住三聖護国寺京城諸山疏）	○	疏藁４			(A)
26 a	1396	応永３・８・10	足利義満公帖(「播磨国円応寺住持職事」)→明昶首座		光明院文書	玉村竹二「公帖考」		原本
b	1396	応永３・10疏	金山明昶住播磨円応寺山門疏	○	東福寺光明院所蔵	日本歴史389		A
c	1396	応永３・10疏	金山明昶住播磨円応寺京諸山疏　岐陽和尚製作	○	東福寺光明院所蔵	日本歴史389		A
d	1396	応永３・10疏	金山明昶住播磨円応寺江湖疏	○	東福寺光明院所蔵	日本歴史389		A
27	1396	丙子(応永３)秋	大江住広厳（諸山疏）	○	峨眉鴉臭集	五山全３		C
28 a	1397	応永４・２・16就崇寿院受請、28日入寺	絶海和尚再住万年山相国承天禅寺語録		絶海和尚語録	大正蔵80	７編２	
b	1397	(応永４・２・28入寺)	絶海和尚再住相国（諸山疏）	○	峨眉鴉臭集	五山全３	７編２	C

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
29	1400	庚辰(応永７)春	笑雲和尚住寿福同門疏	○	懶室漫稿	五山全３		C
30 a	1401	応永８・夏	中和翁住備中神応寺山門疏	○	不二遺稿		７編５	C
b	1401	(応永８・是夏)	和翁中公首座住神応寺諸山疏	○	惟肖巌禅師疏	五山新２	７編５	C
c	1401	応永８・夏	中和翁住神応江湖疏	○	懶室漫稿	五山全３	７編５	C
31	1401	辛巳 (応永８)・７	秀松岳住東福江湖友社疏并叙	○	不二遺稿	五山全３		B
32 a	1402	応永９・７・18在恵日単寮受請、８・24入寺	住播州金華山法雲寺語録		仲方和尚語録		７編５	
b	1402	応永９・秋８	伊仲方住播州法雲寺江湖疏	○	不二遺稿	五山全３	７編５	C or B
33	1402	応永９・秋８	学無学住賀州崇聖寺諸山疏	○	不二遺稿	五山全３	７編５	B
34	1402	壬午(応永９)	在月岩住如意輪　有序 (江湖疏)	○	峨眉鴉臭集	五山全３		C
35	1403	応永10・冬10疏	岐陽入寺(住讃岐道福寺道旧疏)　易東漸製	○	疏藁４			(A) ＊
36 a	1405	応永12・２・５	足利義満公帖(「清見寺住持職事」)→明昶西堂		光明院文書	玉村竹二「公帖考」		原本
b	1405	応永12・３疏	金峰明昶住駿河清見寺山門疏	○	東福寺光明院所蔵	日本歴史389		A ＊
c	1405	応永12・春３疏	金峰明昶住駿河清見寺諸山疏　太白玄和尚製	○	東福寺光明院所蔵	日本歴史389		A
d	1405	応永12・３	金峰明昶住駿河清見寺江湖友社疏	○	東福寺光明院所蔵	日本歴史389		A ＊
37 a	1407	(応永14・10・５公帖)	金山和尚住慧日山東福禅寺語録 (後欠)		大道和尚語録	史料編纂所紀要８		
b	1407	応永14・10・５	幕府御教書(「東福寺住持職事」)→明昶西堂		光明院文書	玉村竹二「公帖考」		原本
c	1407	応永14・10・５	関白一条経嗣御教書(「東福寺住持職事」)→明昶西堂		光明院文書	玉村竹二「公帖考」		原本
d	1407	応永14・10疏	金峰明昶住東福寺京城諸山疏	○	東福寺光明院所蔵	日本歴史389		A
e	1407	応永14・10疏	金峰明昶住東福寺江湖疏	○	東福寺光明院所蔵	日本歴史389		A
38	1408	応永15・冬	順江住宏済寺 (諸山疏？)	○	曇仲遺藁	五山新１	７編11	C
39	1417	応永24・春	大珠住東山 (道旧疏)	○	晦夫集		７編27	C
40	1418	応永25・秋７疏	岐陽入寺 (住天竜寺諸山疏)	○	疏藁４			(A)
41 a	1419	応永26	照中住万寿 (江湖疏)		心田播禅師疏	五山新別１		D
b	1419	応永26	照中熙首座住万寿法眷并叙　応永己亥	○	瑞渓疏	五山新５		(B)
42	1422	応永29・春	希南顒西堂住浄妙京城諸山并叙	○	瑞渓疏	五山新５		(B)
43	1423	応永30	明窓照西堂住浄智京城諸山并叙	○	瑞渓疏	五山新５		C
44	1424	応永31・冬	竹菴和尚住東福道旧并叙	○	瑞渓疏	五山新５		C
45	1424	応永31	月林瑚西堂住浄智同門并叙	○	瑞渓疏	五山新５		C
46	1427	応永34・春	洪源住神応諸山疏并叙	○	漁庵小藁	五山新６		C
47	1427	応永34・秋、(十刹陞位)	禅伯元住開善道旧并序	○	流水集	五山新３		C
48 a	1428	(正長１・３・20入寺) [扶]	用剛和尚住相国寺 (入寺語録)		叢林文藻			
b	1428	正長１・春	用剛治西堂住相国同門并叙	○	瑞渓疏	五山新５		C
49	1428	戊申 (正長１)・３	叔芳住南禅 (諸山疏)	○	晦夫集			C

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
50	1428	正長１・５	松堂和尚住建長江湖	○	幽貞集	五山新４		C
51 a	1428	(正長１)	文林住建仁（山門疏）		九鼎重禅師疏			D
b	1428	(正長１)	郁文林住東山諸山疏		晦庵稿	続群28輯下		D
c	1428	正長１・秋	文林住建仁（同門疏）	○	続翠稿	五山新別１		C
52 a	1429	正長２	伯仁勇首座住豊後岳林道旧并叙	○	瑞渓疏	五山新５		C
b	1429	正長２・秋	伯仁首座住豊岳林并序（同門疏）	○	続翠稿	五山新別１		C
53	1429	永享１	淳朴菴住慈受（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
54	1429	己酉(永享１)冬10	汝舟住南禅并序（江湖疏）	○	晦夫集			C
55	1429	己酉(永享１)秋	前寿勝青岩住弘祥（山門疏）	○	九鼎重禅師疏			C
56	1433	(永享５・７・28入寺)［扶］	徳中住相国并序（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
57 a	1433	永享５・冬	初先天住北伊神応并序（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
b	1433	永享６・季春(３月)	初先天住雲竜山神応（同門疏）	○	流水集	五山新３		C
58	1433	永享６	恕中住天竜（同門疏）	○	流水集	五山新３		C
59 a	1435	(永享７・10・４)［綜覧７］	宝山住天竜（道旧疏）		続翠稿	五山新別１		D
b	1435	(永享７・10・４)［綜覧７］	鹿苑宝山和尚住天龍江湖疏		晦庵稿	続群28輯下		D
c	1435	永享７・10	宝山住天竜江湖　永享乙卯十月　信仲製		疏藁１			(D)
d	1435	永享７・冬10疏	宝山入寺（住天竜寺江湖疏）　篤信仲作	○	疏藁４			(A)
60	1439	永享11	璉器之住岳林并序（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
61 a	1440	永享12・秋８	鳳瑞渓住相国江湖并序　永享庚申秋８月	○	流水集	五山新３		C
b	1440	(永享12・８・29入寺)［扶］	瑞渓住相国（道旧疏）	○	続翠稿	五山新別１		C
62	1440	永享12・秋８	陽伯純住円覚并序（同門疏）	○	流水集	五山新３		C
63 a	1441	嘉吉１・秋	江西和尚住南禅道旧疏并序	○	瑞渓疏	五山新５		C
b	1441	(嘉吉１・秋)	江西住南禅（江湖疏）		晦夫集			D
64 a	1442	(嘉吉２・１・19領管領帖)［扶］	虎山住相国（諸山疏）	○	晦夫集			C
b	1442	嘉吉２・春	虎山住相国（江湖疏）	○	続翠稿	五山新別１		C
65 a	1443	(嘉吉３・12・24入寺)［扶］	東岳住相国（江湖疏）		晦夫集			D
b	1443	嘉吉３・冬	東嶽住相国道旧疏	○	続翠稿	五山新別１		C
c	1443	(嘉吉３・12・24入寺)［扶］	東岳和尚住相国（同門疏）		心田播禅師疏	五山新別１		D
66	1444	文安１・３	匏芳磵住永徳并序（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
67	1444	文安１・孟夏（４月）疏	大翰入寺（住美濃大興寺同門疏）	○	疏藁４			(A)
68	1444	文安１・冬10疏	雪窓照首座住広厳道旧(疏)	○	続翠稿	五山新別１		B
69 a	1445	文安２・８・３入寺	勝剛柔和尚住凌霄山普門禅寺法語		雑貨鋪19			
b	1445	文安２・秋８疏	勝剛柔西堂住普門道旧(疏)	○	続翠稿	五山新別１		B ＊

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
70	1445	文安２・秋	成器西堂住大慈山門疏	○	霊松集	宮崎県史研究11		C
71 a	1446	文安３・２・21	瑞岩和尚住東山建仁禅寺法語		瑞巌和尚語録			
	1446	(文安３・２)	瑞岩住建仁寺入寺疏		蝉菴稿			D
b			①住建仁山門疏　啓天与					
c			②同道旧疏　篤信仲					
d			③同江湖疏　播心田					
e			④同友社疏　鳳瑞渓					
f			⑤同々門疏　派江西					
g	1446	(文安３・２)	惺瑞岩住建仁（江湖疏）		心田播禅師疏	五山新別１		D
h	1446	(文安３・２)	瑞岩龍惺住建仁江湖疏		春畊集	五山新別１		D
i	1446	(文安３・２)	瑞岩惺西堂住建仁（友社疏？）		瑞渓疏	五山新５		D
j	1446	文安３　春２疏	瑞岩住建仁（同門疏）	○	続翠稿	五山新別１		B
72 a	1446	文安３・秋８疏	雪岡入寺（住東福寺道旧疏）　黙存耕製	○	疏藁４	信濃史料８		(A)
b	1446	文安３・秋８疏	雪岡入寺（住東福寺江湖友社疏）　華岳製	○	疏藁４			(A) ＊
73	1447	文安４・３疏	起竜入寺（住長門長福寺京城諸山疏）	○	疏藁４			(A)
74	1447	文安４・孟夏（４月）	大有和尚住南禅并序（同門疏）	○	流水集	五山新３		C
75	1449	宝徳１・８	成九峰住万寿并序（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
76	1450	宝徳２・３	竜室珠首座住崇祥同門疏	○	霊松集	長崎大・教・社63		(B)
77	1450	宝徳２・９・晦（夢窓国師百年忌）	楨国庸住建仁（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
78	1450	宝徳２・冬（夢窓国師百年忌）	台金庭住阿之桂林（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
79	1451	宝徳３・秋	演玉清住周州高山（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
80	1451	宝徳３・冬	快翁剣西堂住大慈山門疏 有序	○	霊松集	宮崎県史研究11		C
81	1452	享徳１・秋	韶舜徒住越之永徳并序（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
82	1452	享徳１・12	晟大信住濃之竜門并序（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
83	1453	享徳２・８	朴堂和尚住南禅（道旧疏）	○	流水集　駢驪	五山新３		C
84	1453	享徳２	栢古心住建仁并序（同門疏）	○	流水集	五山新３		C
85 a	1455	享徳４・中秋（８月）	春起竜住東福（諸山疏）	○	流水集	五山新３		C
b	1455	(享徳４・中秋)	春起竜住東福江湖疏		村庵藁	五山新２		D
86	1455	康正１・是歳	啓天与住開善同門疏并序	○	村庵藁	五山新２		C
87	1458	長禄２・秋	季林育首座住竹林江湖疏	○	村庵藁	五山新２		C
88 a	1460	(長禄４・２・５領公文、同13日入寺)［扶］	天英住相国道旧（疏）		薈蔔集	五山新１		D
b	1460	(長禄４・２・５領公文、同13日入寺)［扶］	天英住相国江湖疏		村庵藁	五山新２		D
c	1460	長禄４・２疏	天英住相国寺同門疏	○	疏藁４			(A)

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
89	1460	寛正１・秋	衆宝洲住播州法雲（山門疏）	○	默雲集	五山新５		C
90	1465	(寛正６・７・29) ［綜覧８］	逸仲住天竜同門（疏）　有序	○	雪樵独唱集	五山新５		C
91 a	1465	(寛正６・12・５) ［綜覧８］	東遠和尚住南禅諸山（疏）		桂林駢儷			D
b	1465	(寛正６・12・５) ［綜覧８］	東遠住南禅同門（疏）　有序	○	雪樵独唱集	五山新５		C
92	1466	文正１・仲夏疏	瑤林正玖住信濃西岸寺京城諸山疏	○	信濃西岸寺所蔵	日本歴史389		A
93	1466	文正１・秋	東白住筑之承天江湖（疏）　有序	○	雪樵独唱集	五山新５		C
94	1466	文正１	東白住建長諸山（疏）　有序　文正初元丙戌	○	桂林駢儷			C

④戦国初期

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
95 a	1475	文明７在和州興雲寺受請、３・20入寺	住京兆竜宝山大徳禅寺語		景川和尚語録	大正蔵81	８編８	
		(文明７・３・20入寺)	景川宗隆住大徳寺入寺疏		景川和尚語録	大正蔵81	８編８	
b	1475		①住大徳山門疏　建仁天隠	○				C
c			②住大徳同門疏　南禅蘭坡	○				C
96 a	1475	文明７・11・20就城北大昌院受請、同臘八入寺	天隠和尚住山城万年山真如寺法語		天隠和尚語録			
	1475	(文明７・12)	天隠竜沢住真如寺入寺疏		天隠和尚語録	五山新５		
b		①今月日疏	①天隠竜沢住真如寺山門疏　祖渓徳濬製	○				B
c	1475	②文明７・12疏	②天隠竜沢住真如寺江湖疏　横川景三製	○				B
d	1475	(文明７・12・８)	天隠住真如江湖疏		補庵京華前集	五山新１	８編８	
97	1478	文明10・秋９疏	文伯入寺（住東福寺諸山疏）	○	疏藁４			(A)
98 a	1478	文明10・９入寺	住平安城竜宝山大徳禅寺		西源特芳和尚語録	大正蔵81	８編10	
	1478	文明10・季秋疏	徳芳禅傑住大徳寺入寺疏		西源特芳和尚語録	大正蔵81	８編10	B
b			①特芳和尚住大徳山門疏　南禅竺関和尚製	○				
c			②特芳和尚住大徳同門疏　東福季弘和尚製	○				
99	1478	(文明10・11・12入寺) ［扶］	牧庵住天竜同門（疏）有序	○	雪樵独唱集	五山新５		C
100 a	1480	(文明12・３)	統正宗住聖福（諸山疏）		幻雲疏藁		８編12	D
b	1480	文明12・３疏	正宗住聖福江湖疏并序	○	補庵京華続集	五山新１	８編12	B
c	1480	文明12・３疏	安山江湖疏　三横川		禿尾鉄苕帚付録	五山新４		E
d	1480	文明12	（安山）法眷疏　寅闇		禿尾鉄苕帚付録	五山新４		D
101 a	1480	文明12・６・21入寺	再住竜宝山大徳禅寺語		虎穴録	大正蔵81	８編12	
	1480	文明12・６月下澣疏	悟渓宗頓再住大徳寺入寺疏		虎穴録	大正蔵81	８編12	B
b			①山門疏　相国横川和尚製	○				
c			②同門疏	○				

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
102	1481	文明13・1疏	月船住駿河清見寺同門疏	○	清見寺文書	静岡県史資料編 中世3		A ＊
103a	1482	(文明14・2・21受請、3・16入寺)	東山建仁寺初住法語		翠竹真如集	五山新5	8編14	
b	1482	文明14・2・21就大昌院受請、同3・16入寺	東山建仁禅寺入寺語録		天隠和尚語録			
	1482	(文明14・3)	天隠竜沢住建仁寺入寺疏		天隠和尚語録	五山新5		
c	1482	①今月　日疏	①天隠竜沢住建仁寺山門疏　桂林徳昌製	○				B ＊
d	1482	②文明14・春3疏	②天隠竜沢住建仁寺諸山疏	○				B ＊
e	1482	③文明14・姑洗（3月）	③天隠竜沢住建仁寺江湖友社疏　正宗龍統製	○				B ＊
f	1482	④文明14・3疏	④天隠竜沢住建仁寺道旧疏	○				B ＊
g	1482	⑤文明14・3疏	⑤天隠竜沢住建仁寺同門疏　古桂弘稽製	○				B ＊
h	1482	文明14・6［3］	天隠住建仁山門（疏）　壬寅六月		桂林駢儷			(D)
i	1482	(文明14・3)	天隠住建仁道旧（疏）		桃源疏		8編29	D
j	1482	(文明14・3)	前真如天隠和尚住建仁同門（疏）		桂子禅味			D
104	1483	文明15・3疏、3月27日入寺	前聖福玉浦西堂住東福江湖疏	○	補庵京華別集	五山新1	8編15	B
105	1483	文明15・6	芳仲住円覚（道旧疏）	○	翰林葫蘆集	五山全4	8編15	C
106a	1484	(文明16・9・18入寺)	舜沢住天竜（江湖疏）　代黙雲翁		幻雲疏藁		8編16	D
b	1484	文明16・秋9疏	舜沢入寺（住天竜寺道旧疏）　横川製	○	疏藁4		8編16	(A) ＊
107a	1485	文明17・4・16	足利義政公帖写（「相国寺住持職事」）→横川和尚		蔭涼軒日録		8編17	
b	1485	文明17・4・21就常徳院受請、同28日入寺	相国入寺法語		補庵京華新集	五山新1	8編17	
	1485	(文明17・4)	横川景三住相国寺入寺疏		補庵京華新集	五山新1	8編17	
c		①今月日疏	①山門疏　桃源瑞仙製文	○				①B
d		②文明乙巳夏4月疏	②諸山疏　蘭坡景茝製文	○				②B
e		③文明17・孟夏疏	③道旧疏　正宗竜統製文	○				③B
f		④文明17・孟夏疏	④江湖友社疏　天隠竜沢製文	○				④B ＊
g		⑤文明乙巳夏4月疏	⑤同門疏　月翁周鏡製文	○				⑤B
h	1485	(文明17・4)	三横川住相国（江湖疏）		黙雲集	五山新5		D
108a	1485	文明17・9・27在仙館受請、10・13入院	蘭坡和尚住五山之上瑞竜山太平興国南禅々寺語録		雪樵独唱集	五山新5		
b	1485	文明17・10疏	蘭坡住南禅江湖疏	○	補庵京華新集	五山新1	8編17	B
c	1485	(文明17・10・13)	前相国蘭坡和尚住南禅諸山（疏）		桂子禅味			D
d	1485	(文明17・10・13)	蘭坡住南禅同門（疏）		桃源疏		8編29	D
e	1485	(文明17・10・13)	茝蘭坡住南禅（道旧疏）		黙雲集	五山新5		D
109a	1485	文明17・9・30	足利義政公帖（「肥後国清源寺住持職事」）→慈暘首座		清源寺文書	熊本県史料中世篇1	8編17	
b	1485	文明17・秋	輝伯暘公住肥後清源　有序（諸山疏）　代黙雲翁	○	幻雲疏藁		8編17	C
110a	1485	文明17・冬12疏	文玉箠首座住永興（京城）　諸山（疏）	○	半陶文集	五山新4	8編17	B

No.	西暦	年　月　日		序	出　典	収録刊本	大日本史料	備　考
b	1485	(文明17・12)	文玉簹首座住永興同門（疏）（周興の同門疏）		半陶文集	五山新４	８編17	(D)
c	1485	(文明17・12)	簹文玉住永興（同門疏）（周麟の同門疏）	○	翰林葫蘆集	五山全４	８編17	C
d	1485	文明17・臘月疏	文玉簹首座住周防永興道旧疏		補庵京華新集	五山新１	８編17	E
111 a	1486	(文明18・８・９領公帖、16日入寺）［扶］	桃源住相国山門（疏）　今月日疏	○	半陶文集	五山新４	８編18	(A)
b	1486	(文明18・８・９領公帖、16日入寺）［扶］	仙桃源住相国（江湖疏）		黙雲集	五山新５		D
c	1486	文明18・秋８疏	桃源入寺（住相国寺道旧疏）　悟了庵製	○	疏藁４			(A)
d	1486	文明18・秋８疏	桃源入寺（住相国寺林泉友社疏）　月翁製	○	疏藁４			(A)
112	1486	文明18・秋９疏	喜笑岩住南禅諸山（疏）	○	半陶文集	五山新４	８編19	B ＊
113	1486	文明18・秋９疏	竺心梵密住天竜寺諸山疏	○	菊池秀言氏所蔵文書		８編19	A ＊
114 a	1486	文明18・10・４入寺	実伝和尚住大徳入寺法語		大弘禅師語録	大徳寺禅語録集成２	８編19	
b	1486	今月日疏(文明18・10)	実伝宗真住大徳寺山門疏	○	大徳寺文書13		８編19	A ＊
c	1486	文明18・冬10疏	実伝宗真住大徳寺同門疏	○	大徳寺文書13		８編19	A ＊

［凡例］

○はじめの［No.　］欄には通し番号を入れ（編年順）、適宜、枝符号ａ，ｂ，ｃ～を添え、同一グループ（セット）であることを示した。

○入寺疏自体に年次がない場合、『大日本史料』、『史料綜覧』（＝綜覧）、『扶桑五山記』（＝扶）などによって年月日を入れた。その場合は、年月日を（　）で囲んだ。

○本表は、序のある（有序）入寺疏の表示を基本とするが、それに対応する入寺語録、公帖、また入寺疏（無序も）は便宜上，セットとして併せて表示した。

○［収録刊本］欄だが、略称で示した場合の正式名称は次の通りである。大正蔵＝大正新修大蔵経、五山全＝五山文学全集（上村観光編）、五山新＝五山文学新集、続群＝続群書類従。

なお日本歴史389－玉村竹二「応仁以前の五山入寺疏の伝存－瞥」（1980年）、玉村「公帖考」－『日本禅宗史論集下之二』（思文閣，1981年）収録、宮崎県史研究11－山口「日向大慈寺入寺疏と京城諸山疏・相城諸山疏」（1997年）、史料編纂所紀要８（東京大学史料編纂所研究紀要８）－山口「入寺語録の構造と年表」（1998年）、長崎大・教・社63（『長崎大学教育学部社会科学論叢』63）－山口「中世九州禅院入寺関係未刊史料をめぐって」（2003年）

○［備考］欄には入寺疏の型をＡ．Ｂ．Ｃ～で示したが、その型の基準については本稿の本文で既述した（２ページ）。また別稿「入寺疏の序について」（禅文化研究所紀要28号）で序の本文を例示したものについては、＊印をつけておく。